

# 朝日歌壇俳壇



〈街かど 上野Ⅱ〉

岩尾恵都子

## 大串 章 選

師を持たず進路も持たず卒業し  
病室の悲喜（も）ごもや校群  
質草に農機具のあり草萌え  
能登半島海に祈りの虹架かり  
百歳を超えるひとゐて校見る  
急行は菜の花の駅敷殺す  
鳥帰る原産眠る地をあとに  
飾りたる雛を納めず近き賜ふ  
公園に千の人生花ふぶき  
げんげ田に野球少年集ひけり  
（さいたま市）春日 重信

【評】第1句。孤独感に苛まれた少年、卒業後の進路や如何に。作者の自画像？  
第2句。病室には快復間近な者も居れば先行き不安な者も居る。正に悲喜こもごも。  
第3句。「質草」が「農機具」とは珍しい。農村地域の質屋だろうか。

## 高山れおな 選

野遊のいこいこや日とる  
本日は鬼に負けて亀鳴きぬ  
虎杖を漬けて母ちゃんたちの店  
雲とめく列は婚礼花の杜  
句会終へ友と日永を言ひにけり  
跳ぶふつに石に上がりぬ春の鴨  
縁石と棒切れが好き春休み  
武蔵野の落花をくべりブルドッグ  
春耕のへつり腰を白晝言ふ  
自衛官募集の職黄砂降る  
（京田辺市）加藤 草児

【評】渡部さん。「子捕ろ子捕ろ」は鬼ごっこ的一种。春の日差しの中で続く夢のような時間。小谷さん。イソップに騙されるな、真実は季語の中にあり!? 中島さん。虎杖の漬物も「母ちゃんたち」も野趣横溢。それでいて品が佳いのが手柄。

## 小林 貴子 選

鴨鍋や仕留める迄を聞かざる  
なかはより俄に寂し卒業歌  
春愁などこの腰痛にくらぶれば  
それからはぶらこばかり漕いでます  
ポンゴレに菜花を添へて白ワイン  
春風大阪場所下剋上  
時計見る人の帰心や鶴帰る  
カミュー・クロードル住みし左岸や黄水仙  
病葉や老いて恋しい巷の灯  
すべてを本物通る犬ふり  
（町田市）岩見 陸二

【評】一句目、鴨鍋は美味しいが、鴨の命は失われた。「仕留める」の語がなまなましい。二句目、歌の後半で思いは募るばかり。三句目、春愁は長いでも抒情的だが、腰痛は早く治りますように。四句目、こちらの人生には何があったのか。

## 長谷川 權 選

花衣移るふ闇に色のあり  
小一に壁のそびえる四月かな  
いくつでも入る胃袋春愁  
東大寺領の悪魔駐を焼く  
日本海春まもなくの青さかな  
白き富士消えて一村花吹雪  
陸奥へ春が一気に尊富士  
七十年経ちしも空で卒業歌  
桜餅空也もなかも暖簾替へ  
死に至るサプリメントや黄砂降る  
（さいたま市）関根 道豊

【評】一席。くらがりの衣袴にかかる花衣。刻々と闇に沈んでいく。二席。初めて学校に行く新一年生。大人たちは喜ぶばかりだが。三席。頼もしくもあり、恐ろしくもあり。やれやれの春。十句目。ネーミング抜群の会社。名は体を表さず？

## うたをよむ 学びやの春

駒田 晶子

春。あたらしい生活の始まりだ。  
せんせいにこれあげるよ、と小学生ら  
帰りしにのちのこの日だまり

齋藤芳生

作者の仕事は、塾講師。生徒と保護者が望む進学先へ通えるよう、結果を残さなくてはならない。結果がすべて。けれど、望んだ進路が得られなくても、人生は続く。「日だまり」を見つめる作者の視線は、あたたかく、やさしい。  
教師といふ愚かでもおもしろい仕

事をまたもわれはするなり

染野太朗

作者は、一度、教師という仕事から離れていたのだ。第一・三句の「愚か」「おもしろい」の相反する言葉のぶつかり合い、「しかも」「またも」のリズムの繰り返しに抑えきれない心の弾みが響く。はつたつの定時制高校の朝。生徒三人が断食月に入る。梶原さい子。まさにグローバル社会。作者が勤める高校に、イスラム教徒の生徒がいるのだ。

信じる宗教が異なれば、生活だって異なる。へいくつかの機材を隅に片寄せて放送室をモスクと為しつ。それぞれの生徒に添うべく、学校側をほんの少し変化させる。ちいさな変化が、やさしく心地よい。じゃあって入り組む汗も歌声もときに怒号もそれが教室。大松達知。私は、学校が好きではなかった。いろいろな人が居て、疲れた。けれど今は、大事な場所だったのだと思える。自分と異なる人が存在するということ。この事実を体感できるだけで、学校の学校である理由なのだ。生徒も先生も、頑張ります。春の空気を吸いましょう。（歌人）

## 風 信

高野公彦著「歌の魅力の源泉を汲む わが意中の歌人たち」若山牧水や寺山修司、水原紫苑ら近現代の歌人18人の歌の特徴や魅力をつづった評論集。（終書房・3080円）

第35回斎藤茂吉短歌文学賞 同賞運営委員会主催。玉井清弘さん(83)の「山水」（短歌研究社）に決まった。玉井さんは朝日新聞四国歌壇選者。「山水」は第10歌集。

☆は共選作。入選作はデジタル版にも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300。短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できます（週に2回まで）。QRコードから。

